水と微風の世界

伊藤桂一

中央公論社

伊藤桂一

水と微風の世界

水と微風の世界

©1962

著者　伊藤桂一

昭和37年4月25日印刷
昭和37年4月30日発行

発行者　宮本信太郎

印刷　中央精版印刷

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2-1
電話(561)5921～9番
振替・東京34番

定価300円

検印廃止

目次

第一部　水の琴
第二部　微風の岸

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

第一部　水の琴

1

夜になると、風に乗って、揚子江通いの船の汽笛が、兵舎の隅にまでとどいてきた。

人口十万。安徽省蕪湖県は、揚子江沿岸にあって、江南米の集散地として知られていた。町は城壁を持たなかったが、日華事変当初、中国軍はこの町を日本軍の無血入城に任せて撤退したので、建物もほとんど無疵のままに残されていた。

兵舎は、町の西北の丘陵地にあった。傾斜に沿って幾棟もの建物がある。南京防護の一環を受け持つ連隊本部の所在地で、丘陵のいちばん麓が、酒保や糧秣などの建物になっていた。

柳が、糧秣班勤務を命じられてきてから、すでに一年余りたっていた。その間、彼は寧日なく繁忙に追われて月日を数えてきたが、このほど師団の経理検査があり、糧秣関係に対する講評は特によかった。

それで、糧秣委員（主任）の黒神准尉が、ふだん下積みになって苦労してきた兵隊たちを連れ

て、一夜、土地の料亭へ招待した。このときにはじめて柳は、しみじみと、糧秣に移されて以後の自身の生活の場を振りかえり、この一年が、まことに夢のように過ぎたことを思い返したのである。

黒神准尉は、酒席の人となると明るく砕けて、支那三界へ流れてきた女中相手に、粋な話ばかりに花を咲かせていたが、片隅で神妙に控えている柳に対して、ときどき思いやりのある眼を向けてきた。この宴席へ兵隊たちを案内した黒神の気持の大部分は、柳に対する、ことさらないたわりの情からであったかもしれない。黒神と柳は、同時に同じ中隊を出て糧秣に来たのだが、二人の間には、他の勤務者たちとは違った、さまざまな心労がつきまとった。それをとにかく、無事に一年を越えてきたという安堵で、お互いに深い感慨があったのだ。話の合間に、眼を細めてこちらをみたりする黒神の視線に、柳は熱く通ってくるものを感じてならなかった。

柳は部隊本部勤務に移るまでの約一年を、蕪湖から七十支里ばかり奥にあたる、中隊本部の所在地の黄池鎮で暮した。そのときまでに彼は軍務の実役二年を超えていたが、階級はまだ一等兵のままだった。本部へ来て、黒神の上申によって、ようやく上等兵に進級した。彼の経歴上の理由からいえば、或いは当然のことであったかもしれないが、中隊での不当な圧迫によるものであることも明白だった。

黒神准尉は、痩せて背の高い男だが、兵隊から叩き上げてきただけに精悍な気力は身に備わっ

ている。黒神は、柳を誠実で使える男だと見抜いて、自分が中隊を去るときに引き抜いてきた。柳はその期待を、はるかに越えて精励してきている。糧秣には何人かの下士官もいたが、乙種幹候が多く、かれらは遊び好きだし、それでいつのまにか、下士官事務までが柳に移行していた。魚菜の購入から、補給請求書に伴う糧秣一般の交付も受けに行く。一日現場につき切りでいるコック長の軍曹に代って、一旬毎の献立表も作製する。雑用も多かったが、馴れるに従って、仕事を円滑に処理しながらも、結構ひまもこしらえて行く方法を覚えていった。柳が職務に従順だったのは、黒神の好意がよほど身にこたえていたためと、長い間の軍隊での陰惨な虐待をされたことへの、諦観の姿勢もあったからだろう。

黒神は、中隊本部では、まるで目立つことのなかった柳を、自分が拾い出してきたその着眼の正しさを、酔ったりするとしばしば人に誇ることがあった。従って彼の柳に対する眼には、特別な慈愛のようなものがこめられていた。軍隊内部における人間関係というものは面白いもので、確たる理由もなしに互いが深く触れ合うこともあり、また、眼にみえぬ悽愴な闘いを繰り返して行かねばならないこともある。中隊本部における、黒神をめぐる事情が、ちょうどそのことを具体的に示していた。

黄池鎮は、揚子江の支流沿いにある小さな町で、中隊長関村中尉の統轄だったが、黒神が、あらゆる手段を通じて、中隊を脱出しようとしたのも、関村中尉に対する、耐えきれぬ苦痛からの

反撥であったといえる。黒神は、中隊本部で人事を扱っていたが、兵隊の身上調査簿を繰りながら、そのなかから柳をより抜いたのだった。

その夜、黒神からの使いが、兵室の隅にいた柳を呼びにきた。いいふくめられていたのだろう、使いの者は、柳のごく身近に来てから、ひとりで直ぐ裏手の広場へ来るように、と伝えた。とっさに柳は、自分が何か咎められる行為をしたのではないか、と疑った。思い当るふしはなかった。ただ柳は、いままで確たる理由もなく中隊幹部から傷つけられた記憶もいくつかあり、それで、いささかは不安のまま、裏手の広場へ出向いていった。

晩夏の夜空はいちめんの星明りで、空気に強い草の香がまじった。広場の奥は雑草が群がり、しきりに地虫の声が湧いている。行手に堤防があり、その向うを、闇を呑んでゆっくりと河が流れていた。

星明りのなかに、人影がすぐみえた。なにかの企みでも交す場面のように、その影は、あたりを警戒するふうに、ひっそりと柳に近づいてきた。

「柳か？」

互いに、顔までは、見分け難かったのだ。

「柳です」

「いい晩だな。こっちへ来い。草の上にすわって話すことにしよう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黒神は先に立って、雑草を押し分け、堤防のひとところへ出ると、河に向いて腰を下ろし、柳を傍らに誘った。ふしぎな気がした。柳は入隊以来、というより自身にあの不運な出来事のあって以来、上級の者と、或る種の親しみをもって、身近に接したことは一度もなかったからである。相手の挙動で、決して咎められるのではない、と分っていたが、身をかたくして、そのほとりで黙していた。

「煙草だ」

黒神は、自分も吸いつけた「大前門（ダーチェンメン）」を廻してよこしてから、すぐにいった。

「おれはこの次の発令で、部隊本部の糧秣へ移ることになる。助手をひとり連れて行けるのだが、いろいろ考えてお前をえらんだ。行く気があるなら、ここを一緒に出よう。どうだ？」

「――参ります」

それだけは即座に答えたが、不意で、信じかねる想いもまじって、胸が波打ってきた。暗澹とした日常のなかで、背をくぐめて一日ずつを、息切れする想いで暮して行くことに、柳は疲れ切っていた。救われる道も絶えていた。それが突如として展かれたのだ。しばらくして、今度は明るく疑う眼になって、柳は黒神の眼をみつめた。

「ここはひどい。お前もわかっているだろう」

問いかける口調ではなかったので、柳は黙っていた。黒神はかすかに笑ったようだった。

「お前が行ってくれるとすれば、気楽に話せる。関村の奴だが、実際人間ではないな。おれは上層部の伝手をたよって、本部付になるために懸命の努力をしてきた。関村は口惜しがるだろうが、たかが一中尉の権限ではどうにもならんのだ。おれがお前を選んだのは、それとなく中隊の兵隊を観察してみた結果だが、もちろん一つには、この中隊からお前を抜くことが、関村をもっとも口惜しがらせることになる、と思ったのも理由にはなっている。おれがあいつと戦えるのは、いまはまだこれくらいのことだけだ。ともかく、お前もごく近い将来にここを去るのだから、それとなく身のまわりの準備をしておくといい。——なにか、ききたいことがあるか?」

きくことは、何もなかった。ひどくあたたかなものが、自分の胸を灌漑しはじめているのを、柳は酔うように感じとっていた。からだが浮きあがって来そうなほど、充溢した喜びがその底にあった。実をいえば、声をあげて、叫びたいほどだったのだ。ただ、意外な気がしたのは、柳はいま兵隊として、上層の階級者をすべて、関村を軸とする、ひとつの集団とみなしていた。しかし黒神の言葉は、多くの兵隊たちが口癖にしている愚痴と、ほとんど同じ意味の心境を明かしたのだ。そこに柳は、ほっとした安堵と救いをかんじた。いままでは遠い距離をしか測れなかった黒神に、にわかに人間的な近接感を加え得たのである。

「関村もだが、阿呆な見習士官が多すぎる。おれは今まで事毎に、兵隊たちを擁護する矢表に立ってきた。が、しょせん無駄だということがよくわかった。おれが本部へ移りたい最大の理由

は、機会をみて、関村をこの連隊から転属させる工作をしてやろう、と考えているからだ。おれが中隊にいていかに頑張ってみても、せいぜい関村やその取巻に殴られるだけの結果しかない。おれはどんなことをしても、いつか、あいつを、あいつに向いた土地へおっぽり出してやろうと考えている。必ずやる。——問題は、お前がおれと一緒に中隊を抜けるとなると、中隊からは今までよりも、はるかに疎外されることになるのだが、おれの眼の黒いうちは、決してお前に手はつけさせん。これだけは安心しているがいい」

黒神は、そこまでいうと気がすんだとみえ、起つと、胸を張り大きく伸びをして、柳を促す眼に、のびのびとした表情がうかがえた。軍隊の門をくぐって以来、その夜ほど、解放感にみちた喜びを覚えたことは柳にはなかった。もし彼に何かの痛みが残っていたとすれば、それは自分が去ったあとも、同じようにこの陰湿な中隊で暮さねばならぬ、仲間たちへの同情であった。

関村隊が黄池鎮へ分屯して以来、たしかに周辺の治安はよくなっていた。多くて重機を付す一個小隊、少なくて一個分隊の分屯隊が、関村隊の責任地区へ、黄池鎮を中心としてばらまかれている。それが総員の約半数で、残りは中隊長とともに、寧日なく付近の粛清に歩いている。関村は、中隊を統率する条件として「兵隊を休ませるな」ということを第一とした。強い鋼線のような戦闘力を理想としたのだ。もちろんその為には、自身も先に立って行動せねばならなかった

が、外房の百姓育ちのこのおそろしく頑健な男は、行軍することが飯よりも好きだった。情報を得て目的地に向うときは、自分の気に向くまで絶対に休まない。途中で落伍した奴は放置して行けと命じるが、みかねて誰かが面倒をみることになる。行軍の際に一度でも落ちた奴は、中隊にいる限り永久に黙殺されることになる。落伍者に対する彼の記憶は病的で、事ある毎に「劣等兵」扱いをして、性根の底まで苛烈に虐め抜く方針を持した。そしてこれは、兵を調教する上に於ては、きわめて有効な手段だった。

兵隊たちは殺伐な行動で自身をごま化すか、或いは憂鬱な抵抗を内部に秘めて生きるかの二つに一つを選ばせられた。幹部は中隊長の意を体して、強兵の策として、むやみに厳格に兵隊を教育した。自身教育も戦闘体験も浅い青臭い見習士官が、反関村的な言動をもっている人間に対しては、それがたとえ准尉であっても、無謀な懲戒を加えることを惜しまなかった。それを関村が公然と擁護した。黒神もまた、そうした被害者の中の一人だった訳である。

暗く渦巻くものの底で、兵隊たちは互いを猜疑し合うような生き方に馴れていった。仲間同士の団結の中でなら何でもいえる、という気易さが兵隊生活の中の酸素の役目をする訳だが、それが稀薄になると、互いに呼吸困難を覚えてくる。みんな喘ぎながら生きていた。柳は、さして長い軍歴を経てきているともいえなかったが、これほど厭軍の気分に満ちた中隊は、全支那のどこにもないのではないか、と、しばしば思いつめた程である。

こうした人間の生き方にくらべて、ぐるりの風光は奇妙なほど明るかった。網の目のように張りめぐらされたクリーク（運河）は、楡や槐樹の影を写して澄みさだまっている。雨でさえもが、紗を刷くように煙りながら降る。農家の庭先を流れる水の中で、水牛と水禽が一緒に水を浴びている。草木が自然に歌い出しているような牧歌的な景物が、どこをどう歩いても眼に映じた。おそらく関村は、このような自然の力による人間の馴化を、自身の荒涼たる鞭撻によって、阻止しようとしているのかもしれなかった。

だから、関村の教育が、隊内にいかによく浸透しているかは、他隊と比較できる連隊討伐のとき、もっともよく証明された。関村隊からは、一名の落伍者も出なかった。関村からは懦弱呼ばわりをされている兵員でさえ、他隊の連中とくらべると、はるかにその優秀性を誇り得た。関村は要するに、そうしたことによって、自身の隊が、連隊の最右翼に位置している、という確認を得ることが、何よりも嬉しかったに違いない。

これはのちに、黒神が柳にいったことだが、関村はすでに大尉になるべき年限を超えながら、進級できないでいる、ということだった。これは関村の人間性のなかに、尉官の上位者たるべき人格と包容力を、上層部が認めないからだ。彼の戦闘性、統率力による中隊の功績も充分認めながら、関村個人にはどうしても人気が出ない。これは、関村隊の兵員が、戦闘や行軍に於ては抜群に優秀でありながら、隊全般の空気に、奇妙に暗く沈んだものがある。それが、他隊の者の眼

からみると、はっきりと分るのだ。

「皮肉なもんじゃないか。自分で鍛え上げた中隊に、自分で裏切られている始末だからな。おれはあいつを、いかなることがあっても進級させんぞ」

黒神はそれを、激しい眼をして述べた。関村にとっても、進級できぬことは無念であり、彼を人間的にすさまじく荒廃させている、理由の一つもそこにあったのだろう。柳には黒神の言葉が深く頷けた。柳は、自分が中隊を去れる、という希望が許された夜に、はじめて関村を、遠い位置において、冷静に観察してみることができたのだった。

関村はたしかに、自己の鬱憤を、軍紀の名の下に、部下の者たちに当り散らしていたようである。倖いにして、自身が長となっている警備地に於ては、その権力は絶対だった。おそらくその権力を不当に濫用せずにはおれないほど、あらゆる条件が彼に具備していたということができる。分屯地に於ては、一介の中尉の身を以て、ともかくも王位の驕傲が許されたのだ。

黄池鎮警備隊では、兵隊はほとんど、戦闘そのものでは死亡していなかった。死んだのはすべて事故である。マラリアで就寝している兵を、強引に討伐に参加させて殺す。波の荒れている風雨の時に、水路を押して敵を攻め、舟の顚覆によって死者を出す。内科の練兵休の病人も本部へは通告しないし、もちろん悪化しても入院させない。死亡した場合は、でっち上げた戦闘詳報に記載して、戦死として処理する訳だ。それによって、戦死者以外には絶対に兵力の損耗を来して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.